

# 百済王陵の飛鳥への影響

京都橋大学 名誉教授

猪熊 兼勝

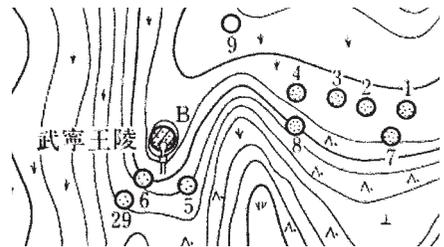
## 一 武寧王陵の発見

一九七一年七月八日、韓国忠清南道公州市内の宋山里古墳群の一石室の閉塞部が開けられた。アーチ形に塞がれた塼を外すと、石彫の鎮獣が悪霊の侵入を防ぐべく威嚇していた。そこには地主神から墓地の購入契約を石版に刻んだ買地券があった。墓の主は斯麻王<sup>しまおう</sup>で諡号<sup>しこう</sup>は武寧王だった。日本では高松塚古墳の壁画発見の前年だったので、まだ世間の関心も薄かったが、それでも新聞は買地券の拓本を掲載し、研究者の関心は、この古墳の話で持ちきりだった。斯麻王は九州加唐島で誕生した武寧王として注目されていたが、発掘十年後、乾漆棺の木材が韓半島に自生しない高野槇と判明した。王が倭国での誕生出自との関わりを滲ませていた。

武寧王陵の石室は、アーチ積の塼室であ

るため中国南朝の塼室墓の影響も指摘されたが、この古墳のある宋山里古墳群は、丘陵南斜面に同形式の塼積室の6号墳と、その北東に野石組でドーム状の壁面を漆喰仕上げにする1〜4号墳や6〜7号墳があり、このなかに熊津遷都に伴う百済王家の文周王、三斤王、東城王の王陵が想定されている。ここで王陵地として宋山が占地され、ドーム式(穹隆式)の玄室をアーチ式(蒲鉾形)の通路で繋ぐ墓室を築造しようとした。そのルーツを遡れば、漢晋代より葬られた塼積古墳の影響を受けた高句麗の石室にたどり着く。

先述したように、源流経路の一つとした中国の嘉峪関魏晋墓などの地下入口を見ると、武寧王陵と同様の塼を円形に積上げたアーチ形の通路を通り、前室と、その奥で玄室に達する。前室、玄室とも四方から寄せるドーム状の天井で全面漆喰仕上げにし



宋山里古墳群

宋山里古墳群  
(右より2・3・4号墳)



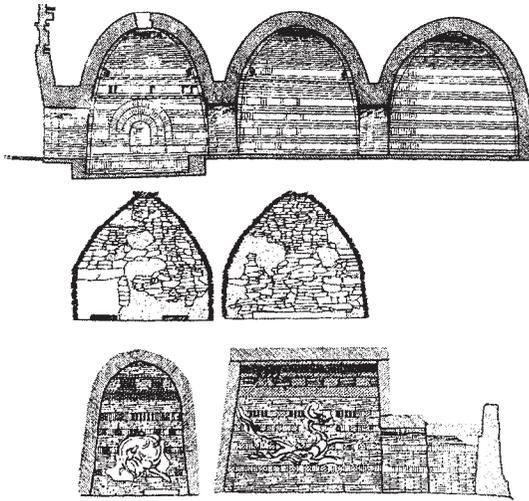
た表面に壁画を描く。こうした塼室墓が高句麗に伝わると、ドーム状の構造を花崗岩の長い切石を井桁積にした。やがて七世紀になると石材を平滑にするため、加工手法の緻密なコタキや、水引で石の表面を磨きあげた壁面に直接壁画を描いた。

百済石室の形式を大まかに見ると漆喰ドーム形、塼積アーチ形、切石積みがあり、時代差と身分差を示している。百済の王陵は、こうした中国南朝と高句麗の墓室を模したが、何故、敵対する高句麗の墓室を採用したのか分からない。出土品のなかに南朝の褐釉陶器が含まれ、百済的解釈では、この頃、歴代王が南朝から百済王として冊封体制下に組み込まれており、南朝の塼積

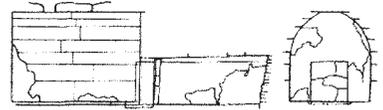
嘉峪関魏晋墓7号墳

宋山里5号墳

宋山里6号墳 | 陵山里中下塚



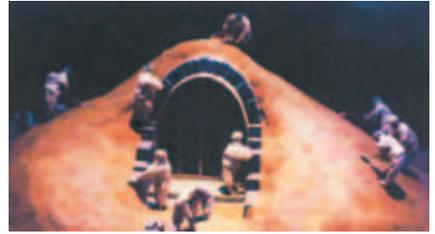
墓室側壁図



墓を模していると理解できる。  
 武寧王陵は、百濟において、伝統となり  
 つつあった宋山里王陵地のドーム状石室を  
 変換し、垂直な奥壁をしたアーチ積磚室に



武寧王陵（復元）



武寧王陵築造模型  
 (国立公州博物館)

した。この石室に使用された磚に「壬辰年作」の線刻があり、武寧王十二年（五一二）に磚の製作をしている。王の葬礼が聖王三年（五二五）、王妃の葬礼が聖王七年（五二九）で、王の生前から造墓に着手した寿陵とわかった。おそらく石室や棺材など王自身の意向が強かったのだろう。当時、『百濟本紀』によると緊迫した軍事情勢が読み取れる。そんななか武寧王は崩御する。

## 二 泗泚時代の王陵

そして聖禮（聖王）が王権を継ぐ。『日本書記』では聖明王と記す。新羅との緊迫したなか五三八年、錦江下流沿いの泗泚（扶余）に都を移す。遷都十六年後、新羅との戦いで戦死する。聖王陵の想定陵は新旧の両都にある。宋山里王陵地は丘陵上斜面から占地しており、最後に築造した斜面下部に築造している磚積石室の6号墳がある。その磚のなかに、武寧王陵で使用されている花紋磚が含まれていて、6号墳の形態は武寧王陵より新しい。さらに、墓室内に遺物が皆無だったところから、聖禮が生前から築造した寿陵が完成したものの空陵となった。そのソックリさんが新都の陵山里王陵群の中下塚（2号墳）で、埋葬痕跡もあったため、姜仁求『百濟古墳の研究』、東潮『高句麗考古学研究』では、実際に聖

王が埋葬されたのが陵山里中下塚としてい  
る。

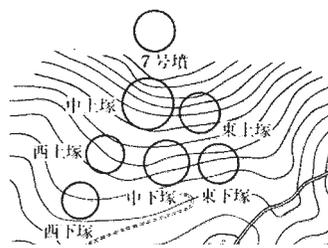
威徳王十三年（五六六）、聖王陵を祀る  
陵寺が建立された。塔の地中に埋めた舍利  
容器を入れる花崗岩製の外容器に「百済昌  
王十三季大歳妹兄公供養舍利」と刻まれ、  
形状は中下塚の花崗岩石室のアーチ形断面  
をイメージしていた。聖王陵を意識してい  
る。聖王の長子である昌王（威徳王）が両  
遺跡に関わっており、デザインに共通性が  
ある。その後、威徳王の弟の恵王、その子  
の法王が王位を継承するが、在位が各一年  
の短期間で、それぞれ王陵群の中上塚、西  
上塚が想定陵となっているものの特定は難  
しい。百済芸術を代表する陵寺跡出土の金  
銅須弥山形香炉は、こうした王家の陵と寺  
の法要で焚かれた。

山本孝文『三国時代律令の考古学的研究』  
によると、百済式古墳は石室幅と長軸の指  
数から面積を割り出し、王陵を想定してい  
る。なかでも陵山里王陵群と陵山里東古墳  
群が他の古墳群より規模が突出している  
ところから、王家と皇族の墳墓とする。東古  
墳群の石室長軸は二斗台であるが、陵山里  
王陵群は三斗台を越える。

宋山里古墳群以来、百済王家は王陵を一  
定箇所集中する傾向があった。陵山の地  
名は後に称したのだろうが、風水思想に基

づき、丘陵の南斜面を占地した七基の円墳  
裾には野石の外護列石を巡らせていた。こ  
この築造順は、宋山里王陵群と違い、丘陵  
の下部を先帝順に占地したらしい。おそら  
く泗泚時代の王陵全体の祭式を意識したの  
ではないか。この野石は泗泚城壁と同一石  
材と思われる。羅城の東を王家の奥津城と  
し、その間に陵寺を設けた。王家にとつて、  
最も身近で重要な斎場となった。

やがて、中下塚と呼ぶ聖王陵に東接して



陵山里王陵群



陵山里王陵群

東下塚

威徳王陵の東下塚（1号王陵）が計画され  
た。そこでは天井の構造を、これまでのアー  
チ形から側壁を内傾斜した台形状や平天井  
の陵山里式石室となった。扶余の中心地に  
定林寺が建立されており、創建時に木塔説  
もあるが、石塔に使う巨大な花崗岩切石の  
調達や、古墳への応用も可能になったのだ  
ろう。石室では重厚な花崗岩板石を組み立  
て、石と石を合わせる目地に漆喰を充填し  
た。東下塚の磨き上げられた石面に直接描



陵山里東下塚

いた蓮華紋、飛雲紋、白虎の壁画が残る。ここでは床と棺台を磚で構成し、切石組の石室、磚積石室を折衷した試行錯誤の状況を物語る。

「土製の磚」から「石製の磚」へ切り替わった陵山里東1号墳は磚積墓から脱却であり、百濟式石室の完成であった。東古墳群は全体の構成に王陵群ほどの整然とした計画性がなく、王陵地ではないが、石室規模が他の百濟式石室より大きく、皇族や高級官僚が被葬者像として浮かぶ。

陵山里以外でも大きな王陵級の石室がある。泗泚城の副都とされる益山（裡里）は花崗岩の産出地として知られ、百濟最大の石造モニュメントとして有名な弥勒寺西石塔の基礎から舍利容器とともに縁起を記した「金製舍利奉安記」を埋納していた。この金石文によって『三国遺事』とは異なる武王四十年（六三九）建立と判明した。従来から想定されていたものの、近くの益山双墳の大墓が武王在位中の寿陵の可能性がさらに強くなった。益山弥勒寺の石造技法が応用されたのであろう。『遺事』の弥勒寺建立事情では、新羅の眞平王が、嫁いだ娘が発願する百濟の大寺院建立に、故国から百工を派遣したと記す。百工は石工の誤りとも解釈できる。新羅の優れた石造技術を導入したことはありえよう。

陵山里王陵、陵山里東古墳の王族墓と云えども出土遺物は、飾り金具など棺材部品と体や衣服を飾る装身具が中心で、土器などの副葬品は極めて少ない。陵山里式石室のなかには、銀花冠飾具や羅冠などの冠骨の出土があり、泗泚時代の各地を統治した官僚墓と分かる。さらに捕虜となり唐の都で命果てた義慈王も寿陵の築造を着手していたか、否か、気にかかる。

### 三 飛鳥王陵への影響

六世紀以来、朝鮮半島、なかでも百濟から先進地の文化を受け入れた飛鳥は、保守的な皇室の墓制も百濟王家の陵墓の影響を受けた。百濟において、倭国と親密となる熊津時代以後の王陵は、丘陵に群集した円墳である。武寧王陵は石室内一面に副葬品を埋納していた。倭国でも、推古二十年（六二二）、欽明陵（見瀬丸山古墳）に追葬した堅塩媛の祭式に二万五千点の副葬品を納めた記載がある。藤ノ木古墳で見つかった、副葬品の数量で威圧する後期古墳の様相であった。泗泚（扶余）に遷都すると、副葬品が極端に少なくなり、被葬者は身分を示す正装をして乾漆棺に葬られた。

河内飛鳥の御廟山古墳は花崗岩切石組で、両側壁各二枚、奥壁・扉石各一枚、水平な一石の天井石で構成する。全面朱彩し

ていたようである。格狭間を半肉彫にした石製棺台に置かれた乾漆棺（漆塗木棺）に海老鍵を掛けた。これを豪華にした構造が天武持統陵である。御廟山古墳は、河内飛鳥に隣接する羽曳野丘陵に立地しており、孝徳陵の可能性が強い。陵山里古墳群の特定する古墳とは細部まで同一の石室ではないが、雰囲気を充分に取り入れている。その改造形として理解できるのは、盗掘記録『阿不幾乃山陵記』の記録で分かる天武持統陵である。水平な天井と花崗岩切石や漆喰で壁面調整した陵山里王陵群と東古墳群の白壁のイメージを、天武陵では大理石で表現し、朱彩していた。奥行き三層規模の石室は百濟王陵に比定する。陵山里東3号墳を調査した梅原末治は石室壁面に朱彩の痕跡を記している。

百濟の敗北を知り、白村江の決戦を控えたまま、斉明天皇は崩御する。斉明陵は飛鳥牽牛子塚古墳であることは、衆人の認めるところである。娘の孝徳皇后の間人皇女と合葬するが、凝灰岩製の石室天井は、緩やかな弧円を描く、一見、百濟古墳と違和感を持つが、宋山里王陵群以来のドーム形イメージを倭国風に改造したのだろう。武寧王陵で王妃の枕に施された亀甲紋と牽牛子塚古墳出土の七宝製亀甲形金具の共通性が浮かぶ。

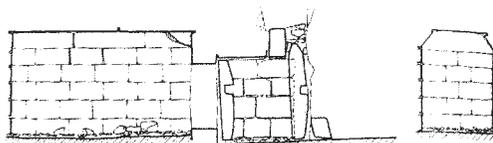


花山塚西古墳

武寧王陵の乾漆棺は有名であるが、陵山里王陵群と陵山里東古墳群の柩は、木棺片と漆膜の断片が出土していて、乾漆棺（漆塗木棺）であつたらしい。いずれも百済の王や皇族の陵墓であるが、百済滅亡後、飛鳥の天皇陵に微妙な変化がある。白村江の戦後処理に関わつた中大兄皇子は、母・斉明天皇と妹・孝徳皇后の大葬と牽牛子塚古墳の造陵を主催する。この古墳から柩の断片として脱括乾漆の破片が出土している。技術的に乾漆より高度な夾紵棺を天皇陵に採用し、乾漆棺を皇子の柩としている。白村江後、百済から亡命者を受け入れるなか、百済王家も使用しなかつた夾紵棺（脱括乾漆棺）に葬る。御廟山古墳と同様、百済の柩になかつた海老錠がある。正倉院の宝物に唐の容器に海老錠にヒントがあると思うが、唐の柩に夾紵棺はない。



平野塚穴山古墳



陵山里東1号墳

二十世紀の初め調査した宋山里王陵群と陵山里東古墳群は木棺材検査の結果、高野槨として報告している。将来、再検討されるだろうが、現状では韓半島に自生しなかつた高野槨を倭国から運んだと理解するしかない。百済から絹をはじめ織物、金工

品などの返礼として貢納品に加えられたのではないか。

陵山里王陵群や陵山里東古墳群で普遍的に断面台形となる斜側壁は、草壁皇子墓説の東明神古墳、高市皇子墓説のキトラ古墳、川嶋皇子墓説のマルコ山古墳がある。また、平坦な天井石の忍壁皇子墓説の高松塚古墳は、いずれも皇子墓である。乾漆棺と同様、百済滅亡後の影響である。ただ、異なるのは凝灰岩切石である。

こうした百済古墳の特徴は、飛鳥時代の高級官人墓級の古墳でも認められる。陵山里東下塚古墳の磚積棺台は白村江の責任に言及した藤原鎌足を葬る撰津阿武山古墳の磚積棺台と共通する。また、陵山里東1号墳は、両側壁と奥壁を花崗岩の布石積をしており、飛鳥の阿部文殊院西古墳と酷似する。側壁と床石の違いがあるが、香芝市の平野塚穴山古墳も影響を受けている。越岩屋山古墳の石組と上段壁面の逆台形傾斜も百済古墳と無関係でない。飛鳥の東部・桜井市には、凝灰岩製の磚積石室が群集する。なかでも鳥見山南麓の舞谷2号墳と女寄峠の山中にある花山西古墳は、磚積の側壁を内傾斜に持送る。北陸、小松市の河田1号墳も凝灰岩切石積で側壁上部を内傾斜する。百済滅亡後、亡命した渡来百済官人の墳墓であろう。